

# 博士論文（要約）

社会学研究科総合社会科学専攻

SD121020 山崎晶子

## 21世紀フランスのエリート形成における言語資本

—名門グランゼコール学生・卒業生と親、準備学級教師の語りから—

### 1. 章立て

本論文の構成は以下の通りである。

はじめに

序章

第一部 現代フランスのエリート形成におけるフランス語の位置づけ

第1章 グランゼコール入学試験におけるフランス語の重視度

第2章 入学試験において求められるフランス語の言語運用能力

第3章 エリート選抜におけるフランス語の位置づけ—プレパ教師の語りより

第4章 エリート形成におけるフランス語の位置づけ—エリートの語りより

第一部結論 現代のエリート形成におけるフランス語の重要性の保持

第二部 フランス語の言語資本の獲得とエリート選抜における機能

第5章 言語資本の獲得方法・獲得過程—エリートのライフストーリーより

第6章 家庭における言語資本の獲得—親へのインタビューより

第7章 学校における言語資本の獲得—プレパにおける教育実践

第8章 エリート選抜試験における言語資本の投資と機能

第二部結論 家庭により獲得される土台、学校により与えられるテクニック

終章 21世紀の言語資本とは何か

補章1 インタビュー調査について

補章2 その他補足説明

参考文献

終わりに

## 2. 問題関心

21世紀フランスにおける言語資本とは何か。本論文は、フランスにおいて、個人のエリート形成に資する能力としてのフランス語の言語運用能力に着目した。この問いの解明に向けて、筆者は現代フランスのエリート選抜過程においてフランス語が占める位置づけ、家庭と学校における言語資本の具体的な獲得過程、グランゼコール入学試験における言語資本の機能について複数の質的調査を実施し、その結果の分析を行った。

問題関心の背景は以下の通りである。フランスでは官民間問わず上級職に就くためには名門グランゼコール（フランスに特有の高等教育機関）修了が必須と言われている。名門グランゼコールに入学するためにはバカロレア（高等教育入学のための国家資格）取得後、大学に進学せずにグランゼコール準備学級（以下プレパと呼ぶ）を経ることが主なルートである。

名門グランゼコール入学試験において重視される能力の一つとして、卓越したフランス語の言語運用能力、すなわち言語資本が挙げられる。しかし、さまざまな社会変化を経た21世紀のフランスにおいても、フランス語の高い言語運用能力は変わらず言語資本としてエリート形成において重視されているのだろうか。そうだとしたら、その能力はどこで、いかに獲得され、エリート形成に資するのだろうか。以上の問題関心に基づいた本論文における問いは以下の二つである。

- (1) 現代フランスのエリート形成過程において、フランス語の卓越した言語運用能力は変わらず重視されているのか。
- (2) 現代フランスの学校教育／家庭教育または学校外活動においてエリート形成に資する言語運用能力＝言語資本はいかに獲得され、エリート形成に資するのか。

本論文はこの二つの問いを経て、現代フランスのエリート選抜過程においてフランス語が占める位置づけを明らかにした上で、家庭と学校における言語資本の獲得方法、過程を具体化する。さらに、それがグランゼコール入学試験でいかに資本として機能したかを示す。最後に、それらの結果から、21世紀フランスにおける言語資本とは何であるかを明示する。

なお、「エリート」は多義的な用語であるが、本論文における「エリート」とは度重なる熾烈な選

抜を勝ち抜き、名門グランゼコールの入学試験に成功した人々を指す。

### 3. 各章要約

各章の要約は以下の通りである。

**序章**では、上記問題関心と同様の問いと研究背景に加え、先行研究レビューと本論文の独自性、主要用語の定義、研究方法について述べた。

**第一部**は、以下第1章から第4章までの4章から構成される。ここでは、本論文における二つの問いのうち1つ目の問いである上記(1)について検証した。

**第1章**では、グランゼコール入学試験におけるフランス語能力の重要性を掴むために実施した名門グランゼコール入学試験のフランス語係数調査の結果について示した。各グランゼコールでは入学試験の全ての科目に係数を付しているため、係数によってその科目の重視具合を知ることができる。フランス語は入学試験において他の科目よりも重視されているだろうか。人文系、理系、商業系における最難関校を1校ずつ選び、その係数調査を行ったところ、どの専攻においても科目としてのフランス語は、他の科目と同程度の係数が付されており、科目ごとの係数だけで比較したところ、重視度が高いとは言えなかった。しかし、理系校の口述試験全体の係数が筆記試験の倍であったり、専門科目でもフランス語の能力が求められる科目名が並んでいたりするなど、専攻を問わず、ほとんどの科目でフランス語の能力が求められていることが判明した。すなわち、名門グランゼコール入学には、文理系問わず、フランス語の能力が低いと太刀打ちできないということが推定された。

**第2章**では、入学試験で求められるフランス語の能力を具体的に示すために、文系の最難校エコール・ノルマル・シュペリウール(ENS)のフランス語試験の講評について検討した。また理系の難関校であるエコール・ポリテクニクの入学試験におけるフランス語において求められる能力について、ポリテクニク卒業生の論考を手掛かりに示した。

ENSの講評には平均以上という評価を得ることの難しさと、深く幅広い教養がないと入学試験に太刀打ちできないことが示されていた。すなわち、教養を背景とした卓越した言語運用能力を資本として入学試験に投じ、それを答案や面接で余裕を持って表すことが難関校で求められる言語資本であるということが明らかになった。

また、エコール・ポリテクニクにおけるフランス語に関する論考において、まず、試験内容が極端な教養主義に陥りすぎないものでなければならないという考え方が示される。しかし、やはり理系エリートにとって、将来にわたり、適切に書く能力は必要であるため、入学試験におけるフランス語試験は重要であるという意見が示された。

**第3章**では、プレバ教師たちがフランス語をいかに位置づけて教育しているのかを16名のプレバ教師へのインタビュー調査結果から検証した。結果は、文系理系ともにプレバ教師全員がフランス語の言語運用能力は入学試験の成功のために重要であると答えた。なぜなら、どの科目であっても、フ

フランス語によって回答するわけであるが、その際に、フランス語の正書法や文法のミスをおかすことなく、適切な表現で回答されることが求められているからである。

また、教師たちはフランス語の重要性をエリート予備軍である生徒たちの将来に結びつけて語った。すなわち、フランス語の能力が重要なのはグランゼコール合格のためだけではない。正しいフランス語で話すことは人前に立ち、人々を導く立場にあるエリートたちにとって必要不可欠な能力であるからである。

**第4章**では、エリート自身がエリート形成過程におけるフランス語の重要性をいかに捉えていたかについて、彼らに対するインタビュー調査結果をもとに検証した。文系と理系に分けて、エリートたちへのインタビューにおける語りの中からフランス語の重要性に関する語りを抽出し、分析した。結果、理系でも文系でもフランス語の言語運用能力は重要であると認識されていたが、理系と文系では、それぞれ求められるレベルの差があることが判明した。すなわち、理系の「重要だが、数学ほど重要かどうか。専攻や学校による」という語り、文系の「重要だが、それだけでは人と差別化できない。つまり人並み外れた高いレベルの言語運用能力の習得が必要」という語りにその差が表れている。

以上の第一部における分析と考察の結果、第一部の結論として、現代フランスのエリート形成において、フランス語は重要性を保っていることが確認された。

**第二部**では、本論文の二つの問いのうち(2)について検証した。第5章から第8章の4章構成である。

**第5章**では、7名のエリート(予備調査における56名の調査協力者から20代4名、40代3名、うち理系4名、文系3名を選択した)のライフストーリーから、言語資本となりうるフランス語の能力の獲得方法と獲得過程について分析した。親が教師であるか、親が教師以外の職業であるかによって分類して語りを分析し、それぞれの言語資本の獲得方法、獲得過程を具体的に示した。

結果をいくつかのポイントに分けて示す。まず、親の職業と言語資本獲得との関連である。親が教師である場合、親たちは、保育学校(日本における幼稚園に相当。基本的に3歳から6歳が通う)前に読むことを学ばせるなどの早期教育を行ったり、本を無制限に買い与えたり、読む本を指定したりするなど戦略的に言語資本を獲得させていたことが語られた。一方、教師以外の親は読書を除き、言語資本獲得につながるような早期教育は行っていなかったということであった。

次に読書である。親の職業にかかわらず、ほぼ全員から言語資本の獲得は読書によるという回答があった。特に多く読んだ人ほど、自分は高い言語運用能力を獲得していると語っている。読書の中身は古典以外にマンガや若者向け書籍なども含み多様なレベルであった。読書を親から勧められたことがないと語るエリートが自分には言語資本がないと語るなど、親が読書をさせたか、させなかったかが言語資本の獲得に影響を与えることが判明した。

一方、学校教育で獲得した言語資本として語られたのは、家庭では学ぶことが難しい書く実践や口述による実践に関するものである。学校教育では、文法や正書法に関する土台としての教育と、それ以降のテキスト解釈、レジュメ、ディセルタシオンなどの形式に沿って思考を示す書く訓練やColle(授業後に少人数で行う口述試験対策の訓練)により、技術的な言語運用能力が獲得されることが語

られた。このように家庭では読書を中心に教養的な言語資本を獲得し、学校では技術的な言語資本を獲得したことが示された。

**第6章**では、エリートたちの親へのインタビューから、親はどのように子供の言語資本の獲得に関与したのかについて分析し、家庭内における言語資本の獲得方法を具体的に明らかにした。また、教育方針や学校教育と家庭教育の重要性に関する考え方など、子供のエリート形成に影響したのではないかと考えられる語りについても分析を行った。言語資本の獲得に関する親の語りは、子供の語りと同様に読書を中心としたものであった。量や質の差こそあれ、全ての親が子供に本を与え、読書をさせていた。読み聞かせもほとんどの親が行っていた。外国人の親や養子を育てる大家族の親など調査に協力してくれた家族の形は多様であり、親たちの教育方針や考え方も多様であった。そのため、共通点を見出すことが難しかった。しかし、言語資本獲得にこだわらなければ、彼らには共通点が見出せた。すなわち、エリート形成にこだわらず、子供たちが自立して幸せな人生を歩むことができるように、安心して勉学に励むことができる家庭環境を整えたり、進路相談に乗ったりするなどさまざまな形で子供を支えていたということである。

**第7章**では、プレパ教師へのインタビュー調査から、プレパではどのように入学試験に成功しうるフランス語を訓練しているのか、その教育実践について具体的に示した。また、プレパの教育の特徴や意義を明確にするために、プレパ前の学校教育におけるフランス語教育である中等教育の学習指導要領を検証した。教師たちの語りから、プレパでは、フランス文学教師はもちろんのこと、それ以外の教科でもフランス語の正書法、文法のような基礎事項を含め、論証の仕方やそのための適切な語彙の用い方に至るまで、日常的に授業内外でフランス語の教育が行われていることが明らかになった。それらに取りこぼしがあると入学試験において不利になるからである。特にプレパ独自の訓練である Colle は、プレパにおいて獲得される言語資本としてエリート形成に大きな役割を果たしていることが窺えた。

一方、中等教育であるコレッジとリセにおけるフランス語教育においては、読み書きの訓練、思考の構築の訓練等を経て段階的にフランス語の能力を獲得させることが目指されていることが明らかになった。それに続くプレパは、プレパ前までに蓄積された能力を使ってグランゼコール入学試験の成功に導くために必要な訓練をし、能力を磨き、完成させる場であることが判明した。すなわち、これらの学校教育の実践を検討した結果、入学試験で機能する言語資本は、家庭教育と学校教育が両輪になり、相互補完的に獲得されるものだと言えるのではないかと考えられた。

**第8章**では、エリートたちが、獲得した言語資本をいかに入学試験の場で投資し、機能させたかということについて、ライフストーリーの語りの中から具体的に示した。この分析のために、エリートたち7名を文系理系に分けて、さらに20代と40代の世代間比較を行った。文系の40代はレトリックや深い教養をもとにした洗練された表現が差別化された能力として現れ、資本として入学試験での成功に寄与していると語った。一方、20代は文系、理系ともに「自然さ」「明晰さ」を評価基準として挙げた。さらに、理系では正書法や文法的間違いをしないなどの「正しい」フランス語の言語運用能力が入学試験にて評価されたことが共通していた。また、読書によって教養を身につけ、それ

を正しく表現する力が評価されると語った。さらに理系 20 代は口述試験において「謙虚さ」が求められ、「わかりやすさ」が評価される能力であると述べた。

ここから考えられるのは、現代のエリートに求められる言語資本は以前に比べて変化しているのではないかということである。20 代と 40 代のたった 20 年の間ですら、彼らの言語資本の捉え方には違いが明確に表れていた。すなわち、ここまで言語資本＝一般人には真似できないような卓越性を含んだ言語運用能力だと捉え、そのような定義のもとに調査、分析を進めてきたが、20 代エリートの語りから、卓越性よりも「わかりやすさ」が言語資本として求められるように変化してきている可能性が示唆された。

第二部の結論は次の通りである。言語資本の獲得は、家庭教育と学校教育の双方によってなされる。家庭教育では読書を中心とした読む力とそれによって得られる教養、語彙、表現などの言語資本の土台となる部分が獲得される。一方、学校教育ではその土台の上に、書く実践、話す実践などを豊富な訓練によって行い、家庭で得られた土台となった言語資本に含まれた知識、教養をアウトプットするための技術を獲得させる。

**終章**では、二つの問いに対する本論文の結論を示した上で、そこから見えた現代のエリート形成における言語資本の重要性と言語資本の捉え方に関する世代間の相違を明らかにした。その上で、ここまでの検証、考察結果から「21 世紀の言語資本」とは何かについて論じた。

本論文における言語資本の獲得過程を通して見えたのは、言語資本には二つの種類があるということである。つまり、家庭教育で獲得した土台の知識の上に、学校ではさまざまな形式の文章の作り方や論証の仕方などを訓練によって技術的な言語資本として身につける。その両方で言語資本を形成しているのである。これを「教養的言語資本」と「技術的言語資本」と呼ぶことにする。

さらに本調査で判明したことは、21 世紀のエリートたちは言語資本として必ずしも家の蔵書の内容や親が話す拡張高い会話内容を受け継いでいるわけではないということである。大衆小説、若者向け文学を多く読んできた 20 代のエリートたちはいずれも家の蔵書の内容を受け継いでいるわけではない。一方、40 代のエリートはいずれも親から渡された古典を読んできており、家には図書館と呼べるほどの蔵書がある。また、言語資本の捉え方にも世代間で相違がある。親から継承した卓越した能力を言語資本と捉える 40 代に対し、20 代のエリートたちは言語資本として機能する能力は、洗練や卓越ではなく自然さ、明晰さ、謙虚さを伴う能力であると語った。

すなわち、「21 世紀の言語資本」とは、家庭教育によって獲得される「教養的言語資本」と学校教育によって獲得される「技術的言語資本」から成る。この二つを合わせた言語資本は名門グランゼコール入学試験の成功に向けて投資され、エリート形成に資するフランス語の言語運用能力である。従来「言語資本」として捉えられてきたレトリック、洗練された表現などを用いる卓越した言語運用能力も資本として機能しうるが、現在では大衆にも届くわかりやすい表現を用いる能力も言語資本として機能しうるようになってきている。このように言語資本の概念、言語資本の獲得過程、言語資本の機能は 21 世紀に入り、大きく変化している。しかし、中身は変化していても、エリート形成にお

いてフランス語の言語資本が重要なことには変わらない。なぜならあらゆる科目、専攻において、読む、理解する、思考する、回答するベースはフランス語だからである。以上が本論の結論である。  
補章においては、全てのインタビュー調査の詳細や研究背景に関わる補足説明等を記した。